

尻別川の未来を考える オビラメの会



OHIRAME RESTORATION GROUP NEWSLETTER 31 April 09

イトウ再導入支流はいづこ

イトウ放流河川探索会ルポ 藤原弘昭（オビラメの会会員）



平成21年2月7日土曜日、後志支庁が施工中の倶利伽羅川落差工魚道(2、3号)を見学後、新たな稚魚放流河川を求めて探索に向かった。

一級河川の中でも尻別川のように主要な河川には国土交通大臣が管理(開発局管理)する指定区間外区間(以下:直轄区間)がある。その上流に知事が管理(土木現業所管理)する指定区間があり、さらに上流は町村長が管理する普通河川がある。

尻別川は、河口から24.2km(豊国橋)までが直轄区間、そこからさらに87km(旧大滝村字愛地)までが指定区間となっている。

逆川から下流側の支流にも一部直轄区間がある。支流の中で指定区間があるものは第一支流のみでも33河川ある。その他の支流や指定区間より上流は普通河川となっている。

探索開始

探索候補河川は、土木現業所真狩出張所が魚道事業を計画しているA川、B川、C川を予定。まずは一番近いA川に向かった。

【A川】

草島会長によると、この川は昔イトウが産卵遡上しており、産卵に適した良好な礫質河床であったところである。

会長の案内により、やや上流部の町

道橋に到着した。橋の上から川を覗くと、「ムムム……」何とも微妙な流れ。雪に覆われていて明確には分からなかったが、おそらく連結ブロックの3面装工と思われ、一定勾配の細い流れであった。

河床はコンクリートブロックが礫に覆われており、礫の供給はあるようだが、藻の繁茂が旺盛で、その状況から推測して水質が心配された。

藻類はどここの水辺にも繁茂しているものだが、家畜糞尿や肥料などに含まれる栄養塩(特に窒素・リン酸)が多く溶け込んでいる河川には多種の藻類が旺盛に繁茂し、それが枯死するとヘドロ化して酸素を大量に消費するため川が酸欠になる(海で言う赤潮)。

そこから少し下流にある橋にも行ってみたが、「あちゃー……」見事な? 積みブロックによる3面装工(凹に近い断面)。水深は10cm程度で、無機質な流れが相当な延長で続いていた。もはや川ではなく、排水路。親魚が遡上できる環境としては限りなくダメに近い状況であった。よって、適否判定は「否」と

言わざるを得ない。

昼食は吉岡事務局長のお店『まぐろ屋十割』。『ライズ』から変身? 進化? し、十割手打ち蕎麦にこだわったおそば屋さんだ。このとき食べた蕎麦とミニまぐろ丼のセットにはまいった。「うめ〜!」まさに絶品。見かけはちょっと怖い事務局長だが、お蕎麦は繊細な作品に仕上がっておりまし

た。昼食タイム中に私が「蘭越取水堰より下流(ダムの影響を受けずに遡上降河できる)を探索したい」と提案したところ、会長がそのあたりの河川(昔の産卵河川)を教えてくださいました。それから予定を変更し、蘭越町のD川とE川を見

【D川: 普通河川】

落差工等が無く、ほぼ自然河川の流況であった。しかし勾配がきつい。河川内には人頭大〜1m内外の巨石までが点在し、小段状の落ち込みが連続している。産卵に適した瀬が非常に少ない印象だ。産卵河川としてはごく少数の親魚しか許容できないと思われ、産卵したとしても稚魚の生息環境が極めて少ないことが懸念される。適否

判定は微妙なところ(「否」に近い?)。

【E川: 合流点から 0.6km まで指定区間】

みんなで橋から川を見下ろす。「おっ! この方がいいかも」と、モニタリングリーダーの大光明宏武さん。確かに河床の礫がいい感じ。橋の下流側に落差工(帯工)が数カ所見えるが、魚道を整備できれば期待が持てる。ちなみに橋は合流点から0.8〜0.9kmほどであるから、見えている落差工の場所は普通河川区間である。

そこで、さらに上流部へ。合流点から1.5kmほどの地点にある民家で除雪区間終了。そこに車を停めて川沿いを歩き、川を確認した。流れは比較的小さく礫の粒径も良さそうだが、イトウが産卵できる広さの瀬が見あたらない。大光明さんの判定では「サクラマス産卵適地ではあるが、イトウにはちょっと狭い」そうである。だとすると、イトウの産卵可能区間は合流部から1.5km以内ということになる。この川はさらに詳細調査を行って適否判定をしたい。

規模的には小さいが、今回見た中では最も評価が高い川であった。

今後範囲を広げて探索を行い、さらに適した河川を探したいと考えている。

ガキの頃から憧れていた尻別川の復活を願って……

(photos / Hirata Tsuyoshi)

31

2005年12月

「絶滅危機種イトウ再導入に向けての倶登山川落差工改修についての試案」を後志支庁に提出。

2006年2月7日

支庁水産課主催の「倶登山川河川構造物改修に係る検討会」でプレゼンテーション。道立水産孵化場、倶知安町役場土地改良係・土木係、国交省小樽開建管理課、農業開発課、北海道小樽土現河川係、支庁農業振興部整備課が参加。

2006年4月

支庁農村振興課が単独事業として魚道整備計画を決定。

2006年5月17日

第1回魚道整備環境配慮検討会(後志支庁主催)開催。当会は(1)メンテフリー構造(2)底生魚も遡上可能に(3)域内材料を使用、の3条件を提案。

2006年6月11日

第2回魚道整備環境配慮検討会。支庁から1号落差工魚道のデザイン提案。「(1)増水期(イトウ遡上期)と低水期(サクラマス)のどちらの水位でも対応できるようにする、(2)魚が迷いがちな「前出し」タイプではなく、堤体の上流側に魚道をつける「引き込みタイプ」にしたい、(3)メンテナンスの簡便さから自然石を用いた階段式、もしくはハーフコーン型、(4)オビラメの3条件(メンテフリー、地場産材料、底生魚も考慮)にも配慮する」(支庁)

2007年7月13日

第3回魚道整備環境配慮検討会。前回討議を踏まえ、支庁がデザイン再提案。「流下魚が下段水タタキに落下したとき脱出できるよう“自然石張り”をする。高さ30cmの石張りで水位を上げ、タタキ両翼に落下した魚もすぐに魚道に逃げ込めるようになる」(流

イトウ再導入河川の落差工に魚道が設置されました

当会が2004年からイトウ稚魚の放流を続けている倶登山川で、全5基の落差工に魚道を取り付ける工事が進んでいます。すでに3基で完成し、残る2基も来春には完工予定。当会の要望でスタートした事業の経過を、工事を担当した北海道後志支庁と当会との意見交換記録(オビラメの会事務局から役員会向けの報告メール)から振り返ります。

意表をつかれたのは、見た目は2段にみえるこの落差工、実は堤体は1枚で、堤体直下に敷いた「水たたき」の直下が河床低下を起こして40cmほどの落差を生んでいる、と説明されたこと。お陰で落差工下流の流芯部に深さ2mの淵が形成され、「潜ったらそこに魚の群れているのが見えた」そうです。建設から40年近く経ったこの構造物は「すでに壊れている」(吉岡俊彦オビラメ事務局長)といえるでしょう。支庁案は落差工本体のコンクリを

削って魚道をつけるかたち(想定する魚道幅は3m=イトウの最大体長×2)。川村洋司さん(道立水産孵化場主任研究員、オビラメ会員)は「オビラメの会が堤体切り下げを要望した時、『管理者の違う構造物を工事するの難しい』とのことだったか?」と指摘しました。つまり単なる切り下げ(何よりローコストでメンテが楽)も可能だということですが、今のところ、検討会の流れは「魚道」です。

下段水タタキ部中央の魚道の直下で、再び落差が生じてしまうのではないかと、懸念が出ました。現状がそうであるように、洪水時にいっそう河床低下が進む可能性は高いそうです。水タタキ直下に透過性護床を設けるべきだ、とのアイデアに対し、「魚道予算ではこの費用は賄えない」(支庁)とのことで、河川管理担当の土木現業所と協議を進めることになりました。これまで土現は不参

加でしたが、検討会としてオブザーバー参加を依頼することになりました。新デザインでも流下魚が水タタキで迷う可能性は完全には解消されないと指摘され、再検討することになりました。支庁側からは、現場で模型実験をしたい、と進歩的な提案がありました。「全国から注目される魚道」(吉岡事務局長)にだいぶ、近づいた気がします。

オビラメ側は一貫してコストパフォーマンスを問題にしていますが、支庁デザインだと経費は見積もりで1700万円程度とのこと。そこで「廃物利用とか手作りとか、より安あがりな方法をオビラメが次回検討会で提案します」と約束してきました。吉岡事務局長は「全国から人が見に来るような魚道を造りたい。その人たちに、近所の農家の人が“この川の水でジャガイモ育ててるんだよ”って言える

ようになればと思う」と強調されました。当初(昨年春)、落差工自体の加工は不可能とされていたが、現時点では、落差工をカットして魚道を付設するデザインを土現側も許容しており、来年以降の2号落差工(落差は1段)でも可能だろうという見通しを、支庁側は立てていました。次は「切り下げ」でいけるかもしれません。(2007年8月27日)

支庁案に対するオビラメ側の考えを吉岡事務局長が力説してくださったこともあり、「これまでの支庁案は白紙撤回」次の検討会でその事情や経緯を説明する「オビラメ案(水タタキに丸太設置)は実験的事业として土現も巻き込むかたちで実

施できるよう調整を急ぐ」という方針が決まりました。やったあ! いっぽう、支庁幹部から当初計上した予算がこれでは消化できないので非常に悩ましい、と率直なコメントも。(2007年10月24日)



BEFORE



AFTER

残念な報告です。後志支庁から担当職員がライズ(事務局)にお越しになり、吉岡事務局長に以下のような提案がありました。改めて支庁内部で検討した結果、1号落差工でのオビラメ案は実現不能で、今年度は1号落差工を従来案で改修することを容認してもらいたい、との内容です。いったん「支庁案は白紙撤回」と明言していたので、それを再撤回したわけですが、支庁側は謝罪し「従来案も多少のデザイン変更は可能」来年度以

1号落差工の改修案について、丸太を利用した岩瀬さん案=オビラメ案の採択はなりません。支庁案を、この日の川村さんの意見などを入れてさらに改良したものがこの日、最終デザインとして決定されました。12月に工事発注、建設費用は総額2000万円超、とのこと。2～5号落差工の改修案について、支庁案は全面魚道方式と、ハーフコーン魚道セットバック式、の2案。オビラメからは「逆台形型の切り下げを基本とし、残り4基いっぺんに着工」、「効果を確かめながら少しずつ改良を加えていく工事方式で進める」の2点を提案しました。支庁は全面・セットバック・逆台形切り下げの3タイプを比較検討する表を作って配布し、総合評価欄はオビラメ案は△印。「2号より上流の落差工改修は、これから時間をかけて議論しよう」と約束したはずなのに、冒頭でこんなふうに一方的に評価するとはなんだ、と吉岡事務局長がすかさず抗議しました。今回初めて、オブザーバーのかたちで土現担当者が出席してくれたのですが、彼らからも「オビラメ案で工費の見積もりが未定なまま比較評価するのはおかしい」と強い調子で意見を述べてくれました。「堤体に傷つける工事は土現のOK

支庁から2～5号落差工のデザイン再提案。「側面に傾斜をつけ、ラッパ型にする」「底面・側面に環境配慮型カゴマットを配置」「耐用性の観点から間伐材の使用はムリ」「吸い出し防止には不織布ではなくコンクリを使い

降、2号落差工より上流部の落差工の改修については、時間をかけてオビラメ案に沿う方法を模索したい」などと説明しました。ここでテーブルを立てては責任を果たせませんので、次回検討会で経緯を説明し、経緯を経緯を記録に残すことを条件に提案を呑むことになりました。みなさまにご尽力いただいたこの間の議論を無駄にしないことを一番に考慮しての判断です。



が出ない、と説明され、オビラメはそれを前提にこれまでアイデアを出してきたが、支庁案のように落差工堤体を最下端まで(河床位置まで)削り取ることも許されるのか」と質問したところ、土現から「上流の土砂が吸い出されないよう工夫されていれば、堤体切り下げに問題はない」と答えがありました。検討会当初から土現の参加があれば、と悔やまれます。さらにオビラメ提案の工期スケジュールについても、支庁側から今回初めて、「2007年度予算で1～5号すべての落差工改修デザインを発注しているので、来年3月までにぜんぶ決定する必要がある」と説明があり、これまで「1号は時間切れだったので、2号以降の工事はじっくり議論しよう」と合意していたのは何だったのか、と吉岡事務局長が意見を述べました。

たい」など。まさに苦労した甲斐があったなあ、というのが率直な感想です。支庁の改良デザイン案を見ると、1月25日提出のオビラメ提案の多くを採用してくれていましたし、この日の協議でさらに何点か、オビラメの意向がくみとられる可能性が高まりました。

い(倶知安町)、「工事の際、農地に配慮してもらって感謝しています。地域の関心が必ずしも高くなくて残念(北部連合)と、好意的な意見が話されました。またオブザーバー参加の小樽土現から「ワッカサップ川・砂利川・ペーペナイ川の古い落差工20数基を対象に、5カ年計画で魚道新設事業を計画しています。同じように検討会を開いて進めていきたいので、ぜひご協力を」とサプライズ提案がありました。



渾水状態の倶知安1号落差工「水たたき」部

速シミュレーションの結果、魚道底部を玉石張りにすれば、洪水時は別にして、現状とほとんど変わらない流速に抑えることができる(支庁)

2007年8月27日

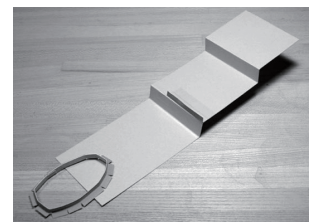
支庁農村振興課との意見交換(後志支庁)

2007年10月10日

支庁農村振興課に発注時期の繰り延べと、「水位かさ上げ」方式で1～2年間の実験をしたい、と提案。

2007年10月24日

支庁農村振興課と協議。支庁に改めてオビラメ「かさ上げ案」をプレゼンテーション。



2007年10月30日

支庁農村振興課と協議(オビラメの会事務局)。

2007年11月26日

第4回魚道整備環境配慮検討会開催。

2007年12月

倶知安川1号落差工魚道工事開始。

2008年2月20日

倶知安川魚道に係る打合せ(後志支庁)。

2008年3月

倶知安川1号落差工魚道工事完了。

2008年5月下旬

渾水期を迎えた倶知安川1号落差工魚道で水たたき部が露出。

2008年6月20日

第5回魚道整備環境配慮検討会開催。

2008年12月

倶知安川2・3号落差工魚道工事開始。

2009年3月

倶知安川2・3号落差工魚道工事完工。

ミニシンポジウムinニセコ(2月8日) & オビラメ勉強会(3月21日)りぽーと

2月から3月にかけて、オビラメの会はミニシンポジウムと勉強会を連続開催しました。

焦点は、流域の各支流にたちはだかる落差工への魚道設置問題。

担当機関も交えて、熱い議論が交わされました。

【放流イトウの追跡調査】2月8日

モニタリングチームの大光明宏武会員が、俱登山川でのイトウ追跡調査の途中経過を発表しました。放流後すみやかに下流に分散していくだろうというおおかたの予想を裏切って、2004年秋に放したイトウ(「デカ」のこども)が、今でも放流地点付近に残留していることが判明。「07年放流魚(「ノリカ」のこども)は早いうちに流下分散したと思われます。すでに先住のイトウ(04年放流魚)がいたせいか、あるいは親が違うことによるのかも」(大光明さん)。残留している04年放流魚は体長30〜35cmほど。「年齢的には40cmを越えてもおかしくない。成長のよくない個体が残っているのかも知れません」(大光明さん)。

稚魚・幼魚期のイトウが好む生息場所の解明も進み、「このデータを次の再導入河川の選定に生かしたい」と大光明さんは話しました。

【検証・オビラメ復活 30 年計画】3月21日

「親魚養成とある程度の稚魚放流は達成されたものの、放流魚回帰が未確認で再導入の方法論をまだ確立できていないこと、何本かの試験河川への放流を目指していたがクトサン3号川1本での実験にとどまっていることから、当初の30年計画より少し遅れていると考えられます」(川村洋司さん)

「俱登山川で今春、親魚が回帰してくると、今後一気に各河川への展開が進む可能性もある。そのとき環境整備が間に合うのだろうか、ととても心配」(吉岡俊彦さん)

「かつて繁殖河川だった支流でも、いまは産卵環境と稚魚育成環境の両方がワンセットでそろっている川がほとんどない。今後は稚魚生育環境のみ、産卵環境のみ、という場所にも実験的に放流していくことも考えていいと思う」(大光明さん)

「本流発電ダム(6カ所)で区切られたエリアごとに放流地点を設けては? モニタリングは釣り人からの情報に頼るしかないが」(藤原弘昭さん)

「ただ放流」というのはダメ。このことは厳密に検討する必要があります」(川村さん)



意見交換するオビラメ勉強会参加者たち

【3支流での落差工魚道計画】2月8日

尻別川を管理する北海道小樽土木現業所から、新たな魚道整備計画について説明を受けました。尻別川支流の砂利川・ワッカタサップ川・ペーペナイ川で、2012年までに30基弱の落差工や帯工に魚道をつける計画です。



左から沼田雄一・大光明宏武各会員、草島清作会長

【魚道工事に関する意見交換】3月21日

オビラメ「なぜ砂利川・ワッカタサップ川・ペーペナイ川に?」

土現「真狩出張所管内で下流側から選びました」
オ「残念ながら3河川とも、ブロック張りされていたり水質が良くなかったり、イトウ産卵環境としてはあまり評価できず、優先度は低い。対象河川の変更は可能ですか?」

土「難しい」
オ「投資効果の見極めは大事で、例えば魚道を造った結果、外来種のニジマスが生息域を拡大してしまうことも考えられます。事前事後のモニタリングが大切ですが、その予定は?」

土「モニタリングは実施しますが、内容は未検討です」



改修工事で直線化されている砂利川

【条例によるイトウ保護】3月21日

「ソラプチ・イトウの会」役員でもある浪坂洋一さんが南富良野町条例の概要を解説しました。また川村さんが道希少種条例での指定に向けた最新の動きについて解説しました。

ニセコ近藤小 でイトウ授業 をしました

大光明宏武



昨年6月20日にニセコ町立近藤小学校でイトウについての授業をさせていただきました。

近藤小学校の生徒さんには放流したイトウ稚魚(1歳魚)を飼育してもらっていましたが、後に放流してもらうにあたり、その理由を考えてもらうこと、そして地域環境の現状を知ってもらうことが重要と考え、授業内容を「イトウはどんな魚か」「なぜ放流するのか」の2つのテーマに絞って話をしました。

まずは写真から何か感じてもらうだけでも意味があると感じ、授業の始めに「デカ」の原寸大のパネルを見せたところ、皆、目を見開いて「すげ〜! デカイ!」と衝撃を受けた様子でした。このような反応は当然のことかもしれませんが、後々にイトウを含めた自然環境の保護に多分に貢献する

感情で、非常に貴重だと感じました。

また、授業を進める中、尻別川には堰堤が多くあってイトウが産卵場にたどり着けない、などの現状を話すと、生徒の一人から「どうして魚道をつけないのですか」という質問がありました。これは学校として環境問題に対する意識が高いこと、そして生徒自身にも関心があつて真剣に取り組んでいるからこそこの質問だと感じました。

環境教育における今後の課題は、「すげ〜! デカイ!」といった感情を持ってもらえるような何かを提供すること。尻別川流域住民の財産であるイトウが地域の自然環境のバロメーターとしても貴重であることを感じてもらえるような活動をしていきたいと思います。

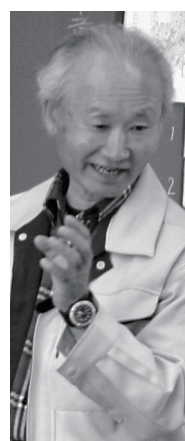
(酪農学園大学、オビラメの会会員)

蘭越高校で「イトウの現状と保護」講演会 川村洋司

川村洋司さんの講演を聞いて 北海道蘭越高校 雨宮望

今回、魚について(オビラメ)あんなに詳しく聞いたのは初めてで、難しいことはよくわからなかった。でも今日講演をしてくださった川村さんが所属している「オビラメの会」の皆様がとても長い計画を立てているのを知った。イトウのことなんて全く考えたことがなかったし、絶滅危惧種だと言うことも知らなかった。30年間という長い計画を立て、こつこつと進めていっているオビラメの会の人たちは本当にすごいと思う。30年あれば何でも出来るって思うけど、川の場合はそんなにすぐに変わるものじゃないと思うから、オビラメの会の人たちだけでなく、北海道に住んでいる人、一人一人が考え、協力し、行動していかなければ

ならないことだと思う。川の工事一つにしても、魚がのぼっていけるような構造を考えてから工事を進めていけばいいことだと思う。産卵のことを考えて川に小石を入れてあげるのもいいんじゃないかなって思う。海に行かないオビラメは生存率が低いといっていたから、天気によ左右されないような何かを考えて、オビラメの生存率を少しでも上げたら絶滅危惧種のラベルを外せて、「オビラメの会」も計画よりも早く解散できると思う。一人一人が何か貢献できることを見つけ、行動していけるようになればいいと思う。これを機に川について考えていかなければならぬんじゃないかなって思う。



北海道蘭越高校(蘭越町、吉川邦史校長)の「平成20年度第1回環境講演会」に招かれて9月16日、生徒たちに「イトウの現状と保護」をテーマに講演をしました。アイヌ文化におけるイトウの位置、江戸末期のころのイトウ資源、当時の尻別川の状況、イトウの生態や保護対策、「オビラメの会」による地元での保護活動などについて詳しく解説しました。

後日、同校から届けられた雨宮望さん(2年生)の感想文を、同校の許可を得て転載します。

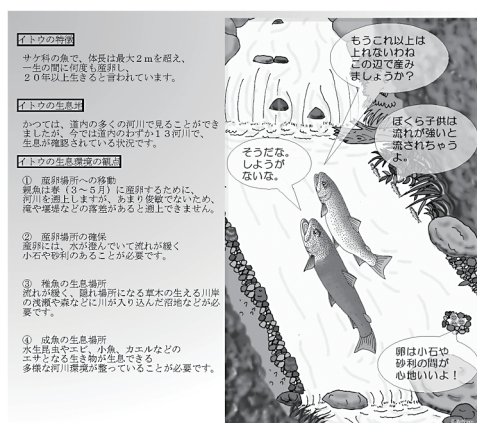
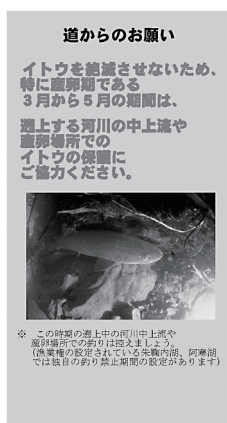
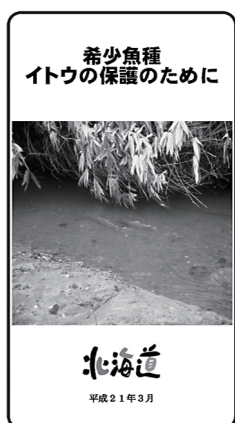
(道立水産孵化場主任研究員、オビラメの会会員)

北海道自然環境課が「イトウ保護リーフレット」を発行

北海道自然環境課・特定生物グループは2009年3月、「希少魚種イトウ保護のために」と題するリーフレットを発行しました。「産卵期である3月から5月の期間は、遡上する河川の中上流や産卵場所でのイトウの保護にご協力ください。」などと呼びかけています。

「北海道レッドデータブック」(2001)はイトウを絶滅危機種と認定していますが、「北海道希少野生動植物の保護に関する条例」の指定からは漏れており、道による具体的なイトウ保護施策は初めてです。

当会も加盟するイトウ保護連絡協議会は2008年3月、高橋はるみ北海道知事あてに「イトウ個体群の保護管理に関するご提案」を提出し、「真に効果的なイトウ釣り規制のための合意形成」「地域ごとの保護管理」「生息地保全・復元に向けた河川・森林管理者との協議体制確立」を要望しました。また2008年5月から10月にかけて、猿払村・ニセコ町・別海町・斜里町・釧路市で「リレーフォーラム」を開催し、各生息地ごとに異なるイトウ生息状況に即した保護管理政策の提案に務めました。



第8回北海道イトウ保護フォーラム2009 in 朱鞠内湖

「イトウ保護、釣り人とともに」

開催日 2009年5月23日(土)午後1時～
会場 朱鞠内湖畔「ワカサギ亭」
主催 朱鞠内湖淡水漁業協同組合
共催 イトウ保護連絡協議会
講演



川村洋司氏(道立水産孵化場)「イトウ資源の管理は釣り人とともに」
千葉貴彦氏(北海道フィッシングガイド)「釣り人にできること」

「オビラメの会」は新入会を歓迎します

「尻別川の未来を考えるオビラメの会」は、会費と寄付金などで運営される市民団体です。みなさまのご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。年会費は2000円です。郵便局の振り込み用紙に住所、氏名、電話番号を明記のうえ、入会希望と書き添えてお振り込み下さい(手数料はご負担願います)。会員期間はお振り込みいただいた日から年度末(5月)までです。おおむねひと月以内にニュースレターをお届けします。

■年会費2,000円
■郵便振替
02720-9-11016
■加入者名
「オビラメの会」

標識オビラメ見つけたら
☎0136-44-2472
オビラメ事務局マデ

ご支援
ありがとうございます

オビラメの会は、
会員のみなさま
よりの会費と、日
野自動車グリーン
ファンド、セブ
ン-イレブンみど
りの基金、パタゴ
ニア日本支社、丸
紅フットウェアの
助成金を受けて
活動しています。

patagonia

日野自動車グリーンファンド

セブン-イレブンみどりの基金

Marubeni Footwear Inc

オビラメの会ニュースレター 第31号(2009年4月発行)
OBIRAME Newsletter No.31 April 2009

■発行 ■ 尻別川の未来を考えるオビラメの会
■編集 ■ 平田剛士
■印刷 ■ (株)須田製版 (北海道滝川市栄町4-4-1)
■発送 ■ 吉岡俊彦
■郵便振替 ■ 02720-9-11016 加入者名「オビラメの会」
■オビラメの会事務局 ■

北海道虻田郡ニセコ町富士見65「まぐろ屋十割」内
吉岡俊彦方 〒048-1501 TEL/FAX 0136-44-2472
copyright 2001-2009 Obirame Restoration Group
<http://homepage3.nifty.com/huchen/Obirame/index.html>

水と空気、みどりの大自然
ニセコが好きだ
楽しんだあとは川を語ろう

まぐろ屋十割

ニセコ町富士見65 TEL/FAX 44-2472
Email / itou110@sa2.gyao.ne.jp